

10-1		主題	ターミナルケアで残された想いをみんなでかなえよう	
ターミナルケア		副題	ターミナルケアを知り、連携の力を引き出した事例	
連携の在り方と力				
研究期間	2ヶ月	事業所	居宅介護支援・こもね介護計画センター	
発表者：岡田 晶子（おかだ あきこ）			アドバイザー：岩下 清子（いわした きよこ）	
共同研究者：与那原 貴子（よなはら たかこ）・清水 晴美（しみず はるみ）				
電 話	03-3959-7447	メール	kaigo-shien@komonenosato.com	
FAX	03-3959-7438	URL	http://www.komonenosato.com/	

今回発表の事業所やサービスの紹介	板橋区でも比較的、大病院が多く地域医療や町内会の活動も残っている地域である。緑豊かな敷地の中に施設があり、2・3階が特別養護老人ホーム（ショートステイ併設）、1階は在宅部門の通所サービス（一般・認知症対応型）、訪問介護、訪問看護、居宅支援事業所、地域包括支援センターが設置。また、今回報告の結婚式の開催場所となった喫茶店（障害者雇用）を運営している。
------------------	---

《研究前の状況と課題》 同法人は複数の事業所が併設されていることで、地域住民や病院等から様々な相談を受ける。特に訪問看護ステーションが緊急時対応可能な体制がとれているため、医療依存度の高い方や終末期に対応できる法人としての期待が高まっている。 終末期には、医療面以外にも多面的な支援が必要であり、住みなれた環境で、利用者等が望む最期の時間をお手伝い出来るよう、多職種間・事業所間の「連携強化」が課題であった。実際にはターミナルケアに関わる職員は限られていたために「ターミナルケアとは何か？」イメージが持てない職員も少なくなく、取り組みに対する想いも様々であった。そこで、より多くの職員にターミナル期のケアへ参加し、個々に感じてもらうところから始め、連携から生まれる力を知るための働きかけが必要であった。	《研究の目標と期待する成果》 「ターミナルケア」とは、「本人が最期まで生き切ったと思えるように、また家族や関係者が十分に最期まで支えきったと思えるように支援すること」である。後悔が残らないように支援者は働きかけることを心がけ、そのためには「残された時間の把握」と「アセスメントによる本人や家族の想い」を把握することが大切と考え、そこから得た情報の共有と役割分担ができるように常に連携し、支援するよう努めている。 今回は、「終末期の母に捧げる娘の結婚式」を法人全体で支えるという目標をたてた。その達成には部署を越えた協力や職種に限らない参加が必要となる。この成果として、「限られた時間の大切さ」、「本人や家族の想いをかなえる」こと、そのための「連携」について、出来るだけ多くの職員が想いを共有することを期待した。
--	--

《具体的な取り組みの内容》

事例概要；58歳女性 脳腫瘍による末期癌
症状；発語ができず片麻痺

家族状況；夫・息子の3人暮らし、娘は入籍
を済ませていたが、親の病気で挙式をあきら
め、同居を続け介護していた。

家族が介護申請で、包括支援に相談に訪れ
る。対応した保健師は、今後医療支援が必要
になると判断し、法人内の訪問看護師へ相
談。看護師は、本人の痛みの中には、母とし
てきちんと嫁がせてあげられていない全人
的な痛みが強いととらえ、解決のためには自
分達の力だけでは難しいと考え、受けもった
ケアマネジャーへ相談をする。ケアマネジャ
ーは訪問看護師と「娘の結婚式を挙げさせたい」という①本人の想い（ニーズ）を引き出
し、挙式の実行計画を提案。本人、家族は喜
び、式を行うことが生きる目標となる。また、
②式は家族たちが主体的に取り組むことで
家族関係が再構築されと考え、法人はその
後方支援とした。③企画を知り賛同した職員
や牧師等の協力で、法人運営の喫茶店にて開
催④式の最後には職員による花道を設定し、
職員にターミナル期の関わり方の一端を知
ってもらった。⑤多くの職員がそれぞれに自
分にできることを考え自主的に協力した。そ
の一ヵ月半後、入院先で亡くなるまで式を挙
げたことが家族を支え続け、訃報を受けた職
員も考えるものがあった。

《取り組みの結果と評価》

残された時間を想定し、本人の心残りを痛み
ととらえ、短時間であったが本人・家族の想
いをひとつにでき、本人の想いにそった支援
をすることができた。それは的確なアセスメ
ントと連携の成果といえる。

「末期癌の母に花嫁姿を見せたい」という想
いが、職員の心を動かし、多くの積極的な参
加と提案を生み、利用者・家族のために協力
した。普通であればターミナルケアに関わる
ことの少ない部署（事務所や管理栄養士、デ
イサービス等）の職員も花道へ参加し、祝福
しながらも、同時に「終わりゆく命」や、残
された時間に「自分たちが出来ること」を感
じ、考える機会が得られた。

課題としては、支援を開始した時すでに末期
であったため、結婚式を挙げるのが先だっ
てしまい、家族に死を受け止めるための支援
が不十分であったことがあげられる。

《まとめ》

末期がんの場合は早期対応・スムーズな連携
が求められる。日頃から自分達の役割や出来
る範囲を知り、必要となればその専門性を持
った者に協力をもとめる意識や体制作りが
必要だ。今回は、ターミナルケアについて職
員間の想いの共有という点では大きな前進
があったが、今後できるだけ早い段階で相談
を受け、対応できる体制作りを考えてゆきた
い。

《提案と発信》

ターミナルケアは医療だけで問題解決はできない。治療からギアチェンジし、本人が望む時間を過ごすことが重要視される。そのためには予後を知り、早期段階から本人の意向を確認することと、医療職も福祉職も皆が専門性を生かし支えていくことが大切である。そして、その力を結びつける役割がケアマネジャーにはある。本人と家族の想いをかなえる為に様々な関わりや協力を求めていきたいと思います。

【メモ欄】